



Part 18, Vols 71-74: Cultural History, 9th Series

全4巻セット定価(本体89,000円+税)・ISBN 978-4-86340-326-0・菊判

イギリス食文化:イン／宿屋

これまでのイギリス食文化史シリーズの続編として、宿屋(Inn)、居酒屋(Tavern)、パブ(Public House)といった飲食の場がイギリスの社会、文化においていかに重要な役割を持っていたかが判る著作を構成。Part 18ではおもに、中世から19世紀にかけて社会活動の重要な場としても機能したインについての重要著作を集成。

Contents

Volume 71: Charles G. Harper *The Old Inns of Old England: A Picturesque Account of the Ancient and Storied Hostelries of Our Own Country* (1906) 2-in-1 vol.

ISBN 978-4-86340-327-7・736 pp.・27,000円+税

著者ハーバーは、多作なジャーナリスト・作家、イラストレーターで、「歩き回り熱中者、サイクリスト、田舎好き」と自称する。イギリスの地方の歴史、風土の本や旅行ガイドを数多く書いた。イギリスの古街道を馬車で旅してまわる紀行文シリーズで特に知られる。街道と馬車とくれば必ずインが付いて回るわけで、本書はインについての故事来歴をまとめた20世紀初頭の重要著作である。著者は古い忘れ去られた多くの本を参考にしながら、本書の調査のために5000マイルも旅をしたという。本書には著者本人のスケッチのほか写真や古い印刷物が含まれる。

The Ancient History of Inns • General History of Inns • The Eighteenth Century • Latter Days • Pilgrims' Inns and Monastic Hostels • Historic Inns • Inns of Old Romance • Pickwickian Inns • Dickensian Inns • Highwaymen's Inns • A Posy of Old Inns • The Old Inns of Cheshire • Inns Retired from Business • Inns with Relics and Curiosities • Tavern Rhymes and Inscriptions • The Highest Inns in England • Gallows Signs • Signs Painted by Artists • Queer Signs in Quaint Places • Rural Inns • The Evolution a Country Inn • Ingle-nooks • Innkeepers' Epitaphs • Inns with Odd Privileges • Inns in Literature • Visitors' Books • Index

Volume 72: A. E. Richardson & H. Donaldson Eberlein *The English Inn, Past and Present: A Review of Its History and Social Life* (1925)

ISBN 978-4-86340-328-4・324 pp. (incl. 1 col.)・20,000円+税

建築史の専門家2名による著作で、Batsford社の「Old English Life」シリーズの1冊。戦間期にでたインについての最も優れた概説書。建築様式と室内装飾の歴史に視点を置いて、当時の社会生活の様子も交えて書かれたもので、写真とスケッチを用いて解説。この当時まだ営業していた古いインのリストが加えられていて、優れたインを車で巡る旅を提案している。リチャードソンは建築学の第一人者で歴史的建造物の保存運動にも取り組み、イギリス建築の歴史について記念碑的著作がいくつかある。エーバーラインは植民地時代のアメリカとヨーロッパのその住宅建築と室内装飾について多くの本を書いたアメリカ人で、アメリカとヨーロッパ双方で歴史的建造物の保存運動に取り組んだ。

The English Inn from the Fifteenth Century to the Restoration • The Development of the Hostelry in the Late Seventeenth, Eighteenth and Early Nineteenth Centuries • Old London Inns • Coaches and Old Methods of Travelling • Inn Signs • Small Inns, Alehouses and Wayside Taverns • Touring • Topographical List of Old Inns • Index

Volume 73: B. W. Matz *The Inns and Taverns of "Pickwick": With Some Observations on Their Other Associations* (1921; 2nd ed., 1922) & *Dickensian Inns and Taverns* (1922; 2nd ed., 1923) 2-in-1 vol.

ISBN 978-4-86340-329-1・594 pp.・22,000円+税

著者マッツは1902年にディケンズ・フェロウシップの設立者の一人で、1905年から亡くなる1925年まで「ディケンズ」の編集長を務め、数々のディケンズ関連書の執筆、編集を行った人物。本書に収めた2作はディケンズの著作に登場する多くのインやタヴァンについて論じたもの。特に馬車の時代が終わろうとする頃の旅の描写が良く知られる「ピクウィック・ペーパーズ」から多く取り上げている。著者は、鉄道やホテルが隆盛になっていく中で、より人同士の関わり合いが濃密だった馬車旅やインが廃れていくのが残念でならなかったが、自動車の利用が増えれば街道沿いのインやタヴァンが再び活気を取り戻すのではないかと希望を持っていた。



[*Inns & Taverns of Pickwick*] "Pickwick" and the Coaching Age • The "Golden Cross," Charing Cross • The "Bull," Rochester, "Wright's Next House," and the "Blue Lion," Muggleton • The "White Hart," Borough • "La Belle Sauvage" and the "Marquis of Granby," Dorking • The "Leather Bottle," Cobham, Kent • The "Town Arms," Eatonswill, and the Inn of "The Bagman's Story" • The "Angel," Bury St. Edmunds • The "Black Boy," Chelmsford, the "Magpie and Stump," and the "Bull," Whitechapel • The "Great White Horse," Ipswich • The "George and Vulture" • The "Blue Boar," Leadenhall Market, "Garraway's" and the "White Horse Cellar" • Four Bath Inns and the "Bush," Bristol • The "Fox under the Hill," other London Taverns, and "The Spaniards," Hampstead • The "Bell," Berkeley Heath, the "Hop Pole," Tewkesbury, and the "Old Royal," Birmingham • Coventry, Dunchurch, and Daventry Inns, and the "Saracen's Head," Towcester • "Osborne's," Adelphi, and Tony Weller's Public-house on Shooter's Hill • Pickwick and the George Inn • Index [*Dickensian Inns & Taverns*] Dickens and Inns • Oliver Twist • Nicholas Nickleby • Barnaby Rudge • The Old Curiosity Shop • Martin Chuzzlewit • Dombey and Son • David Copperfield • Bleak House, Little Dorrit, Hard Times • A Tale of Two Cities • Great Expectations • Our Mutual Friend • Edwin Drood • The Lazy Tour of Two Idle Apprentices • Sketches by Boz • The Uncommercial Traveller • Christmas Stories & Minor Writings • Index

Volumes 74: Thomas Burke, ed. *The Book of the Inn: Being Two Hundred Pictures of the English Inn from the Earliest Times to the Coming of the Railway Hotel* (1927)

ISBN 978-4-86340-330-7・428 pp.・20,000円+税

英文学作品に現れるインについてのアンソロジー。表題にある通り、その原初期から鉄道旅客を対象にしたホテルが登場するころまで、いわばインの歴史を文学作品によって追う内容で、およそ200の文を抜粋している。編者はロンドンの生活文化に詳しく、そのテーマで多くの著作がある。またロンドンのライムハウス地区を描いた作品でも知られる。本書序文からすると、著者は執筆した1920年代当時の「モダン」なインはお気に召さないらしく、多くの施設が相変わらず上流気取りなくせに食事が特別美味くないことを忌々しく思っていたようである。

A Lodging for the Night • Mine Host and Hostess • Arrival and Departure • Chambermaid, Ostler, Drawer • Adventure and Encounter • Taking Mine Ease



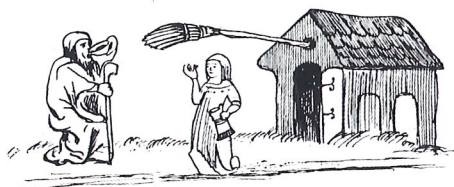
「イン」のさまざま

梅宮 創造 ● 早稲田大学名誉教授

アティーナ・プレスの継続企画として「イギリス研究基本シリーズ」(Athena Library of English Studies)があり、その一項目に「食文化シリーズ」がある。イギリスの食文化に関わるテーマを多方面に求め、重要な資料を各パートにまとめて着々と刊行されている。今回はさらに進めて、飲食の場の花形ともいえるイン (Inn) を加えることになった。

その昔、イギリスのインは旅人にとっての一夜の宿であり、地域住民にとっては、日々の生活に深く根をおろした人間交流の場であった。旅は昔なら馬にまたがり、あるいは徒歩で、あるいは馬車に乗る。近年に至っては車を走らせる忙しい旅もあろう。時代により、移動手段のちがひによって、旅の様相もさまざまに推移変化した。それに付随して、衰亡するインもあれば、宿屋としての機能を保ちつつきてきたインもある。宿泊だけでなく、インは同時に人びとの出遭いの場であり、飲食や談話に興じる集いの場であった。ときにはまた密談を交わしたり、契約を結んだり、悪事を計画したり、ラヴ・レターを綴ったりと、インはさまざまな場を提供してきた。古いインであればあるほど、その古びた外観や屋内の造作には歴史の滲み込み、かすかすの物語が影を落としている。イギリスにはそのようなインが実に多い。さらにインの親戚としてタヴァンやホステルリがあり、エール・ハウスとかパブリック・ハウスなどもある。それらにはいずれ変らぬ共通項があつて、すなわち人は、ここにイギリス文化の象徴を見るのである。

本パートは全四巻から成り、初めの巻、チャールズ・ハーパーの一書はイングランド各地の古いインを手広く紹介し、それぞれのインにまつわる故事来歴に触れる。著者は膨大な資料を漁り、みずから諸方のインを訪ね歩いてはスケッチ画を描き、本書のページをゆたかに飾っている。読者は個々の古いインに残された珍しい伝承や、歴史的事実や、虚実相交わるエピソードのかすかすを堪能することができよう。たとえばアングロ・サクソン時代の呑屋の軒先からは「酒棒」(Ale-stake) と呼ばれる長い竿もどきの逸物が突き出して



AN ALE-STAKE.

From the Luttrell Psalter.

て、通行人に呑屋の所在を示す。古いインの暖炉ぎわでは「肉焼き犬」(Turnspit dog) が休みなく四肢を動かして大きな肉の鉄串

を回転させている。あるいはインの看板でも、「絞首台看板」(Gallows sign) とやら、門前の道をまたいでサッカー・ゴールばりの大胆な看板が今もわずかに残っているようだ。それやこれやを文と絵から、また古い写真をながめながら知るのには愉しいかぎりである。

次の巻、A.E. リチャードソン・他による著作は各地各様のインを取り上げながら、土地に根ざしたイギリス文化の息吹をありありと伝えてくれる。古文書やら旅人の手紙やらを引用し、写真、版画、スケッチ画をちりばめて過去を現在によみがえらせようとする。ロンドンの古いインが鉄道の到来によって衰微すると、人びとの興味は郊外へ、地方へと移った。本書の終章では、道路地図をたよりに東西南北のインを訪ねて、イングランド各地の風土に直接触れていこうとする。

三巻目の著者、B.W. マッツはディケンズ・フェロウシップの機関誌『ディケンズ』の編集長を務めた人だけに、本書はディケンズ一色に染めつくされている感がつよい。前半はディケンズの出世作『ピクウィック・ペイパーズ』の叙述を追いつつ、作中のインやタヴァンに言及する。後半ではディケンズのフィクションを制作年順に片っぴから取り上げ、加えてスケッチ集や随想にも手をひろげる。それに止まらず、ディケンズの実人生におけるインとの関わりにも話がおよび、たとえばハムステッドの丘上に建つ「ジャック・ストロース・カスル」にはディケンズが使用した椅子だのベッドが置いてあるとか。ディケンズ作中のインには実在のモデルもあれば、作者の想像によるものもある。『ハウスホルド・ワーズ』誌に掲載の「ドードー亭」(The Dodo) なども架空のインだが、およそ十年後にルイス・キャロルが『不思議の国のアリス』にドードー鳥を登場させたのは、もしやディケンズの一篇に刺激されたものか。

最後の巻、トマス・バークの書は中世のラングランドやチョーサーから十九世紀のトロロープに至るまで、数多の詩人、作家を選び、インにちなんだ作中の該当箇所を抜粋して掲げる。名作のアンソロジーといった趣であり、さすがに粒ぞろいの文集である。インにおける客と主人、客の到着から出発まで、女中や従僕、冒険だの遭遇だの、人間交渉にからむ種々様々なドラマが随所に躍動する。こういう珠玉のくだりを集めて読者の愉しみに供してくれるのは、まことに有難い。ひとつこれを枕頭に置いて、あちこち読み散らしながら、夢か現かの桃源郷にさまよいたいものである。序文に曰く。「我らのインは生活の中心にあり、永遠の若さを誇るものである」と。過去は死物どころか、人びとの心につつまでも、みずみずしく生きているという次第だろう。その事実を納得させてくれるのが本書である。ついでながら著者は、古いインの魅力を忘れかけている現代のイン・オーナーへ、そして現代の軽薄な自動車旅行者へと、この一書を捧げている。故きを温めて新しきを知れ、というべきか。本パートの有終の美を飾る、実に味わいぶかい一巻である。



THE "BLACK SWAN," EBBW DONN, GLAMORGAN.

【発行】

Athena Press

株式会社 アティーナ・プレス



〒112-0011 東京都文京区千石4-33-18

Tel: 03(3946)2117 Fax: 03(5977)8026

E-mail: eigyo@athena-press.co.jp

http://www.athena-press.co.jp

【取扱書店】